

## 研究ノート

## 学術論文の執筆方法に関する一考察

## — (その2) 指導教員との出会い —

リム ボン<sup>i</sup>

キーワード：方法論，指導教員，アーティキュレーション

## 1. 本稿の目的

前稿では、学術論文の性格を明示し、これを効果的に執筆するための手法のひとつを披露した<sup>9)</sup>。

本稿では、大学院に進学した院生たちが指導教員を選択する際に心得ておいた方がよいこと、その一端を明らかにすることを目的とする。

前稿からずいぶん長い月日が経ってしまった。予期せぬ病に見舞われ、生死を彷徨っているうちに第二弾を執筆するタイミングを逸してしまった。これ幸い、そのままフェイドアウトするつもりでいた。ところが、前稿を読んでくださった社会学研究科修士から「何時になったら第二弾が出るのか」という催促が寄せられた。しかも複数からである。これには驚いた。これまで産業社会論集には多くの論文を投稿してきたが、このような反響があったのは初めてのことであった。とても嬉しかった。

このような経緯を経て、今回ようやく第二弾を投稿する運びとなった。けれども、この連載は今回をもって終了することとした。その代わりとってはなんだが、自分なりに工夫を凝らし、渾身のエネルギーを投入した。読者にとっても面白い読み物に仕上がっていることを切に願う。

## 2. 大学院生と指導教員の関係の類型化

文部科学行政の制度のもとでは、大学院に在籍する学生たちは指導教員の指導を仰がなければならない。故に指導教員の役割は極めて重要なのだ。とりわけ、将来プロの研究者になることを目指す大学院生たちにとっては指導教員との出会いが決定的な意味を持つ。指導教員の質が問われる。

はたして、指導教員と呼ばれている人たちの全てが大学院生を上手く指導しているかという点、残念ながら、そうとは言い切れない現実がある。

アカハラ、パワハラ、セクハラの訴えが後を絶たない。大学院生と指導教員との間で多くのトラブルが発生していることは周知の事実であり、社会問題化しているといっても決して過言ではない。

せっかく大学院生になったのに、指導教員との関係に問題が生じたら……。これは大学院生たちにとってとても不幸なことである。このような事態を回避するためには、指導教員と大学院生との間で何らかのコンセンサス（たとえば本稿末尾に記しているような）が必要となる。これが本稿を執筆するにいたった動機である。

いま、指導教員と大学院生の関係を、それぞれの力量をもとに類型化してみよう。ここで言う「力量とは何か」ということが最初に問われるはずである

i 立命館大学産業社会学部教授

が、この点については後の文で展開しているつもりなので、ここでは省略する。

一つの図式を考えた。縦軸に指導教員の指導能力の大小(上が大、下が小)、横軸に大学院生の力量(学力、モチベーション、バイタリティ等の総合的パワー)の大小(右が大、左が小)を設定し、縦軸と横軸を直行させた。すると四つの面(象限)が描き出される。実際に図を描いてみたのだが、あまりの生々しさに、気の弱い筆者は怖気づいてしまった。文章だけで表現する。

右上を第一象限、反時計回りに、左上を第二象限、左下を第三象限、右下を第四象限とする。この図式を見る限り、第一象限が最も理想的な類型となる。大学院生にとっても指導教員にとっても、双方が最もハッピーな関係を構築することができる関係性だ。第二象限は、大学院生の力量が少々劣っていても、誠実に取り組んでいてさえすれば、なんとか研究成果を生み出すことができる関係性だ。第三象限は論外だ。もしもこのような状態が世の中に存在するとすれば、それは何かの間違いであるとしかないようがない。だから、ここでは触れないこととする。

第四象限。大学院生たちが最も苦労するのがこの関係性に直面した時である。教員が、指導能力では劣っていたとしても、大学院生と誠実に向き合い、サポートしようと努力する人であればいくらか救いはあるが、そうではなく、人格が崩壊していて、意地の悪い人であった場合、大学院生は本当に困った状況におかれる。実際に、そのような関係性に直面して将来を棒に振ってしまった大学院生を筆者は何人も知っている。うつ状態に陥り、自ら命を絶った人もいた。彼ら彼女らは本当に悔しい思いをしたに違いない。人災以外の何ものでもない。

### 3. 本稿の方法論的特質

どのような人物が指導教員に相応しいのか。大学院生と指導教員、どちらも人間なので相性の問題もある。ケースバイケースなのだ。本稿では、筆者が

30数年前に実際に体験した出来事をもとに、筆者なりに考え得る理想的な指導教員像を描き出してみたい。これは結構微妙で、危険で、ヤバイ話になりそう。事と次第によっては、誹謗中傷と受け取られ、名誉棄損で訴えられるかもしれない。だから、間違っても実名を登場させるわけにはいかない。なんらかの工夫を凝らさなくてはならないのである。

思案の末、一つの解決方法に辿り着いた。

それはフィクションを活用することである。

フィクション(小説)の技法を取り入れることで、誰も傷付けることなく、筆者なりの仮説を自由に披露することができる。公序良俗にも反しない。

フィクションであるので、リサーチペーパーにはなり得ないけれども、研究ノートとしては成り立つ。

「本稿はフィクションであり、登場する人物や団体は架空のものである。けれども、実際にあった出来事にインスパイアされた作品である」ということにしておこう。

主人公をエル君と呼ぶことにする。

本稿では、エル君が学部生の頃から学問に興味を抱くようになり、大学院に進学して博士号を取得し、やがて研究者として独り立ちしてゆく過程を、指導教員たちとの出会いを軸に展開する。そうすることで指導教員のあるべき姿の一端を浮き彫りにする。あくまでも小説として。これが本稿の方法論的特質である。

では、ここでいう方法論と何か。蛇足ではあるが触れておこう。

そもそも研究や論文においては、必ず、解決しなければならぬ“課題”が明示されなければならない。そしてその課題を解決するための原動力(最も有効な手段)をみつけなければならない。これが方法論である。方針を示すことといってもよいだろう。

課題を解決するための、根源的な思考の拠り所、コンセプト、このようなものが方法論になることが多い。アンケートや実証実験といった調査分析の方法とは異なる。それらは作業手法(技術)である。しかし、このような作業手法も世の中に登場し始め

た頃には一世を風靡し、研究を大きく前進させるための有力な原動力となり、方法論としての役割を演じたことがある。その最たる例がSASやSPSSなどの統計パッケージである。方法論と分析手法、この両者は哲学と技術の関係とよく似ている。

#### 4. 憧れへの接近（学部生時代）

##### （1）学問は慣れである

1979年4月、エル君は北摂大学工学部建築学科の2年生になっていた。ワクワクしていた。

なぜなら、2年生から授業のほとんどが専門科目になるからだ。1年生の頃は教養科目ばかりでつまらなかった。通学電車の中ではいつも講義概要を眺めながら専門科目の内容にいろいろと空想を巡らせていた。

最初の専門科目、「建築構造力学Ⅰ」の授業が始まった。もちろん必修科目、担当者はワッショイ先生だった。この先生、実は建築構造力学の権威で、建築学会副会長などの要職を歴任した、その筋の大物だ。若い頃はあの今西錦司（日本の霊長類研究の創始者で登山家、1902-1992）とジョギング仲間だったそうだ。本人がそう自慢していた。

エル君が通っていた北摂大学は新設校だった。元国会議員の理事長の方針で、大学のステイタスの向上を図るため、旧帝国大学を定年退官した有名教授を多く雇用していた。ワッショイ先生はその筆頭株だった。授業には毎回二人の助教授（今でいう准教授）が付き添っていた。ワッショイ先生は背広の襟にピンマイクを付け、自分の講義を録音していた。付き添いの助教授たちがあとでそれをテープ起こして、貴重な資料として保管した。

ワッショイ先生の人柄はとても穏やかではあったが、講義の内容は“超”が付くほど難解であった。教科書のレベルを遥かに越える内容で、偏微分方程式などが登場したりするものだから、受講生たちはみな辟易としていた。「建築構造力学Ⅰ」の通常の教科書をみると、内容は入門書レベルで、ごく簡単

な槌子の原理を理解してさえいれば済む程度のものであった。要は、一次方程式で力のモーメントを割り出せばよい。公式さえ知っていれば、そこに数値を当てはめて解が得られる。この段階ではそれで充分なのである。ところが、ワッショイ先生にかかることでそれは済まされない。力のモーメントの原理そのものを解明する作業に突入してしまう。偏微分方程式の展開が延々と続く。学生たちにとって、「建築構造力学Ⅰ」の授業は苦痛以外の何物でもなかった。

時折、うんざりしている受講生たちの表情を見まわして、ワッショイ先生はいった。

「学問は慣れです。特別な才能は必要ない」

そしてニタッと笑った。

不思議なもので、苦行のような授業も5週目ぐらいになると楽になってきた。エル君はそう感じた。慣れてきたのだ。内容も少しずつ理解できるようになっていった。

ワッショイ先生がいったことは本当だった。

ある日、いつもどおり、ワッショイ先生が黒板に方程式を展開していた。それを目で追っていたエル君は、わが目を疑った。あろうことか、ワッショイ先生の方程式に間違いがあったのだ。ある箇所で、マイナスであるはずの符号がプラスになっていた。

エル君はドキドキした。先生の間違いを発見したことで少し嬉しい気分になっていた。

「先生に間違いを指摘してみようか」

邪悪な思いがエスカレートする。

けれども、待てよ、自分の気づきが間違っていたらどうしよう。そうなるとうざい。迷い始めた。心が揺れ、頭が混乱した。だが、指摘しなければならぬという使命感のようなものが勝り、勇気を振り絞って手を挙げた。挙手するエル君にワッショイ先生はいつも通り穏やかな表情でいった。

「なんだね？」

エル君がいった。

「あの～、先生の方程式の展開に間違いがあるのですが」

一瞬にして教室全体が気まずい空気で覆われた。教室の端で立ち見していた付き添い助教授たちの顔面が引きつった。それまで柔らかな笑みを浮かべていたワッショイ先生の顔がみるみる鬼の形相に変貌した(だだだ大魔神やんけ〜!)

「どこがおかしい! 説明してみろっ!」

孫ほど年の離れたエル君を指さし、突き刺すように甲高い声でワッショイ先生はいい放った。

「マズイ。イチビッて質問などするのはなかった」

エル君は後悔した。逃げ出したい気分だった。けれども手遅れだった。素直に思ったことを述べる他に進むべき道はない。

「〇〇段目の符号が逆です。そこは+ではなく-になるはずです」

ワッショイ先生は顔を紅潮させたまま黒板の方に振り向き、そのまま仁王立ちになった。板書した方程式を点検するのに30秒ほどを要したであろうか。先生はゆっくりとエル君の方に向き直った。もとの柔らかな笑顔を取り戻していた。そしていった。

「結構です。君の指摘が正しい」

「オ〜ッ」という歓声が沸いた。氷を張り巡らしたような教室の緊張も解かれた。

授業が終わった時にはエル君は爽快な気分になっていた。そこにワッショイ先生が近づいてきた。

「君。先ほどの指摘、あれはあれで正しくはあるのだが、単に符号の違いを指摘しただけに過ぎない。力学的本質を指摘していない。今後はそのような勉強をなさい」

「はい。ありがとうございます」

エル君はそう答えたが、まったく意味がわからなかった。内心こう叫んでいた。

「知らんがな〜!」

後日、いつもワッショイ先生に付き添っている助教授が廊下ですれ違うエル君に声を掛けた。

「ワッショイ先生が君のことを褒めていたよ。“彼、大学院に進学させたいね”と仰っていたよ」

とても嬉しかった。けれども、その頃のエル君は

既に弟子入りすべき先生を決めていた。

## (2) アーキテクト

「建築意匠論」。専門必修科目の中でエル君が最も好きな授業であった<sup>10)</sup>。トリータ先生が担当されていた。

エル君は初回の授業でトリータ先生の知性に衝撃を受けた。甲高い声を発して展開される講義は実にリズムカルで、淀みなく、理路整然としていた。「あ〜っ」「う〜っ」「え〜っ」などという間の取り方は一切しない。考えながら話すのではなく、考えたことを話すのだ。あたかも用意された原稿を朗読するかのようだった。講義の内容は抽象的で難解ではあったけれど、知性がみなぎっていた。

長身で、端正な面持ち、背筋が伸び、スーツがよく似合っていた。

トリータ先生は大正元年(1912)生まれ、熊本の第五高等学校を卒業後、帝国大学文学部哲学科に進学した。文学や哲学が好きだった。けれども軍人だった父親がこれに激怒した。

「哲学など男子が選ぶべき学問ではない。工学部以外には学費は出さん」

そう言われて困り果てたトリータ先生だったが、やむを得ずいったん退学し、次の年、工学部建築学科に入学した。なぜ建築学科だったのか。それは、工学部にありながら、哲学や美学を主とする専門領域をもつ学科だったからだ。

建築論というジャンルがそれである。西洋哲学(たとえば、実存主義やロマン主義)を軸にすえた建築論の発祥の地はヨーロッパであった。そのヨーロッパにおいてさえ、建築論をこなすことができる建築家、すなわち、“アーキテクト”と呼ばれるにふさわしい人は極僅かであった。日本には5人もいないといわれていた。そのうちの一人がトリータ先生であった。建築歴史学の先生が授業中にそういったのだから事実であろう。

「トリータ先生の講義を聴くことができるなんて、君たちは幸せだよ」ともいっていた。

建築業界の人たちのあいだでも評判だった。

「トリータ先生に褒められた建築物はそれだけで価値が上がる」

昭和14年（1939）、トリータ先生は帝国大学工学部建築学科卒業と同時に満鉄に就職され、建築家として、各種公共建築物の設計施工に従事された。

終戦後、建設省技師を経て、関西の国立大学で教鞭を取られた。某女子薬科大学など、トリータ先生が設計された建築もいくつか現存していた。

超一流の建築論で理論武装をし、デザインセンスにも恵まれた凄腕のアーキテクト。本当にかっこよかった。トリータ先生の弟子になる、エル君は勝手にそう決意していた。

### （3）アーティキュレーション

2年生の必修科目に「設計演習」があった。出題者はトリータ先生で、課題は住宅の設計であった。

一つの課題につき2ヶ月ほどの期間をかけて取り組むのだが、学生たちは毎週、製図室で途中経過の図面チェックを受けた。非常勤講師の建築家たちを含め5人ほどの先生方が控えていて、学生たちは空いている先生のところへ行って図面を見てもらう。

けれども、エル君はトリータ先生以外の人には決して図面を見せようとはしなかった。手が空いている先生が「こっちこっち」と手招きしても、知らぬ顔をしてその場を去った。今にして思うと、嫌なガキだ。

トリータ先生が休憩等で席をはずしている時は、トリータ先生の研究室の前の廊下にしゃがんで待っていた。トリータ先生が研究室から出てくると、図面を差し出した。

トリータ先生は、「他の先生にみてもらえばいいのに～」といいながらも、図面を受け取り、丁寧に点検した。ある日、エル君の図面を点検していたトリータ先生が独り言のように呟いた。

「住宅は、物理的機能を満たすだけでなく、安らぎの空間でなければならない」

意表を突かれたエル君はポカーンとした表情でト

リータ先生を見つめた。その前の週の「建築意匠論」でエル君が提出したレポートに書いた文章だった。

「君、あのレポート、A+を付けておいたよ」

この時は本当に嬉しかった。

4年生になるとゼミに所属するのだが、トリータゼミは最も競争率が高かった。幸運にもトリータゼミへの配属が認められた。トリータ先生は、議論においても、レポートの文章においても、さらには図面のデザインにおいても、ある面で徹底したこだわりを持っていた。

“articulation”という概念だ。

articulationとは分節化という意味である。音楽家や言語学者がよく使う概念だそうだ。

トリータ先生はリズムカルで小刻みな文章やデザインを好んだ。それに反して、ダラダラとした文章をみると、“牛のヨダレのような文章はよくない”とって忌避した。

ゼミでは美学や哲学に関する文献を読まされた。しかもすべて英語だった。議論も抽象的になる。

ゼミの仲間は辟易としていた様子であったが、エル君は楽しかった。

ある日、エル君にゼミでの発表の機会が巡ってきた。

「ゲーテがいうように、“建築は凍れる音楽”であり……」

準備万端で臨んだゼミであった。自信たっぷり得意げと言葉を繋ごうとした瞬間、トリータ先生から横槍が入った。

「ゲーテはそんなこと一言もいっていない。文章にも残していないよ」

エル君は驚いた。

「でも、〇〇出版から出ている教科書にそう書いてあります」

「その教科書が間違っている。それはゲーテではなく、シェリングの言葉だよ」

エル君は驚いた。いくらなんでも、有名な学者の著書で、しかも大手出版社から出されている教科書



にこんな重大な間違いがある筈がない。

さすがのトリータ先生も勘違いをしているのではないだろうか。エル君はそう訝しがった。

ところが、後日、その教科書の改訂版が出された際にその箇所が訂正されていた。トリータ先生が正しかった。

ある日、トリータ先生から進路について問われた。エル君は建築設計事務所で働きたいと告げた。

するとトリータ先生はいった。

「設計事務所に就職したいのなら、修士課程ぐらゐは出ておきなさい。今どきの設計事務所はそうだよ」

北摂大学は新設校で、当時はまだ大学院は設置されていなかった。そこで系列校の浪速工業大学の大学院を受験することにした。エル君の先輩たちも毎年受験していたのだが、未だかつて合格者は出ていなかった。今では考えられないことであるが、修士課程の定員がわずか3名で、内部生にとってさえ難関であった。エル君は考えた。

「全科目満点をとれば、必ず合格する」

9月に受験日があったので、7月から8月にかけての夏休み期間中、毎日10時間、猛勉強をした。

受験科目の教科書もすべて暗記した。学科試験は英語と二つの専門科目の計三科目、その後口頭試問があった。口頭試問の会場には建築学科の全教授が参列していた。なんと、その中に構造力学のワッショイ先生の姿もあった。口頭試問の場で最初に口火を切ったのがワッショイ先生であった。

「君は確か、トリータさんのゼミやったな」

笑みも見せず、睨みつけるようにいった。

ワッショイ先生が二年前に講義を受けていた一学生のことを覚えていてくれた。それ自体は光栄なことではあったが、エル君の心は曇った。

「これで不合格となるのか」

エル君は諦めかけた。というのも、元来、建築デザイン系の先生たちと構造力学系の先生たちは仲が悪く、エル君は建築デザイン系の先生のゼミにいたからだ。建築デザイナーたちは自分たちの芸術的な

造形を力学的にサポートするのが“構造屋”の仕事と考えていた。明らかに上から目線だ。他方、構造力学を専門とする人たちは、デザイナーは構造に無知で、無責任な造形物を夢想して自己満足に陥っていると考えていた。ワッショイ先生も講義中によくデザイン系の悪口をいっていた。

そんなことを思い返していると、都市計画を専門とするミツバ先生が割って入った。満面に笑みを浮かべ、進学後の研究テーマについて質問した。

ミツバ先生はエル君が合格した暁には指導教員になる人だ。ミツバ先生はとても好意的で、表情にはエル君を積極的に受け入れたいという思いがにじんでいた。

エル君も学科試験の出来栄には手ごたえがあった。後で知ったことだが、受験した三科目すべてで満点を獲っていた。これは浪速工業大学の歴史上、誰もなしえなかった快挙だったそうだ。

試験明けの月曜日、北摂大学のゼミ室に行った。トリータ先生がいた。笑顔でエル君に話しかけた。

「合格おめでとう。土曜の夜にミツバ先生から電話があつてね。優秀な学生を送ってくださってありがとうございますと御礼を言われたよ。本当は、御礼を言うべきはこちらの方なのだがね。三科目とも満点、文句なし、だったそうだ」

合格発表は一週間後だったので、エル君は驚いたが、嬉しかった。すっかり浮かれてしまった。次の週から前期試験（当時は9月に前期試験があった）が始まったのだが、まったくやる気が起こらず、「建築法規」という科目にいたってはまったく手が出ず、0点だった。落差が激すぎる、極端な性格であった。

トリータ先生はエル君のことがとても可愛かったようだ。ある日、エル君たちが卒業論文を仕上げるために冬休みにゼミ室に集まろうと話し合っているのを聞いて、「それなら私も来よう」といい、当日、本当に現れた。雑談ばかりで一向に作業が進まない様子を一時間ばかり眺めていたトリータ先生は、「もういいだろう」と声をかけ、エル君たちをお寿

司屋さんにつれていってくれた。エル君たちにとっては一生忘れられない思い出となった。

卒業論文は無事提出した。タイトルは「ル・コルビュジェ研究」。出来栄えについて、トリータ先生は、「前任校で指導していた大学院生の修士論文よりレベルが高いよ」といってたいそう褒めていた。

（後日談その1）：数年後（1989年）、エル君は進学した西京大学大学院で博士号を取得し、そのまま西京大学の助手に任用された。1991年にいわゆる「大学改革大綱化」（中央教育審議会答申）によって文部科学省が規制緩和をする以前のことだ。

「大学改革大綱化」以降、課程博士号取得者が激増するのであるが、それ以前は課程博士を取得するのは至難の業であった。後期課程に進学しても、たいていは単位取得満期退学となり、就職をした後、早い人で40歳前後、遅い人だと定年退職間際に学位を取得するというのが通例であった。理由はレフリー付論文の本数を稼ぐのがたいへんだったからである。

ところが、エル君は主要学会の超難関レフリー付論文を連チャンでクリアし、29歳で博士号を取得した。西京大学大学院工学研究科博士後期課程建築学専攻で史上最年少の課程博士号取得者となった。

真っ先にトリータ先生に報告した。

「学位取得まで早かったね。梅田まで出てきなさい。飯でも食おう」

トリータ先生はそう言ってエル君を呼び出した。エル君はJR大阪駅のホテルグランヴィアのラウンジで高価なミックスジュースをご馳走になり、場所を変えて天婦羅をご馳走になった。

食事をしながらエル君がいった。

「将来的にはどうなるかわからないので不安なのですが、当面は、助手になれたので安定しています」  
間髪を入れずトリータ先生がいった。

「将来的には安心だが、当面は不安定だね」

エル君は驚いた。そういえば、大学院受験の際に提出した書類にゼミの指導教員が記入する所見欄というのがあったのだが、トリータ先生はそこに「将

来大成の見込みあり」と書いて、「これでいいかね」といってエル君に見せたことがあった。そのことを思い出して嬉しくなった。

しばらくして、エル君はトリータ先生のご息からいただいたお手紙で先生が亡くなられたことを知った。慌ててご子息と連絡を取ってご挨拶に伺った。その際に、「どうやって私のことを知られたのですか？」と尋ねてみた。

「遺品整理をしていて父の日記に目を通して、ある時期、頻繁にエルさんが登場していたのです。それでエルさんから届いていた年賀状をみつけ、住所を確認し、知らせたのです。父にとってはエルさんが最後のお弟子さんだったのですね」

あれから30数年が経過した。今でも、エル君が最も敬愛するのはトリータ先生である。

## 5. 彷徨と失望（大学院修士課程時代）

本節ではミツバという姓の先生が3名登場する。同姓の先生が3名、何たる偶然か。とても紛らわしいのだが、“事実は小説より奇なり”だからしょうがない（おっとっ〜！本稿は小説であった！失礼！）。一人はエル君の指導教員となられた方、あとの二人は堂島公立大学の助教授とその上の教授。混乱を避けるため、以下、それぞれミツバ1先生、ミツバ2先生、ミツバ3先生と記すこととする。

特に、ミツバ2先生の描写については刺激的に描かれているが、もちろんこれは実在する人物の話ではない。まだ若かったエル君が、古い時代の権威主義に対して反発する場面を描くために登場させた架空の人物である。ミツバ2先生もそのような時代背景を背負った被害者なのかもしれない。したがって、決して、個人の名誉を傷つけるようなことは意図していない。その点を読者にもご理解いただきたい。

### （1）悲しきコピーマン

1982年4月、エル君は浪速工業大学大学院修士課程に進学し、都市計画研究室に在籍した。指導教員

はミツバ1先生だった。本当はトリータ先生と同じ建築論の専門家になりたかったのだが、トリータ先生は異なる道を示した。

「建築は単体としてではなく都市空間の中に位置付けてこそ、その実存的価値が浮き彫りになる。都市計画を専攻しなさい。その後、建築家（デザイナー）になればよい」

そういわれて、エル君はあっさり都市計画を専攻することにした。まったく主体性のない話だ。

われながら呆れ返るエル君ではあったが、トリータ先生がそういうのだから間違いはないだろうと短絡的に考えた。

そして研究生活の第一歩が始まった。いっばしの研究者に仲間入りした気分であった。

だが、残念なことに、1年目は失望の連続であった。エル君は、スラム研究で修士論文に取り組むことにした。研究者に多く見られがちな机上の空論ではなく、実際に世の中で問題になっている課題に挑戦してみたかったからだ。テーマは「河川敷空間の宅地的土地利用に関する研究」である。

当時、西京市の神川と多美川が合流する河川敷に広大な中洲があり、そこにスクォッター集落（不法占拠地帯）が形成されていた。約100世帯が暮らしていた。住民の内訳は10%が日本人（中には有名俳優の祖母もいた）、90%が在日コリアンであった。

戦後は広島原爆スラムをはじめ各地に同じようなコミュニティがあったが、行政代執行等でほとんどが撤去され、残すは西京市だけであった。

神川は国の一級河川であり、国（当時の建設省）の管轄下にあったが、管理は西京府が代行していた。住宅供給は西京市の管轄であった。

行政は住民の立ち退きを図ろうとしていたが、有効な施策がなく、対応に苦慮していた。

住民たちの暮らしは劣悪な居住環境におかれていた。家屋はバラックで、下水道はなく、汚水は神川と多美川に放流されていた。

この地区で実態調査を実施し、都市計画的な解決策を見出す、それがエル君の研究テーマの特徴であ

った。40年間にわたって国と自治体が解決しようにも解決できなかった問題、それをエル君の研究で一気に解決しようというのだから、意欲的というよりもむしろ無謀でさえあった。けれども、それまで誰も着手しなかった研究テーマだったので、やり甲斐はある。というより、自身も在日コリアンであったエル君にとっては“私がやらずに誰がやる！”という使命感のようなものがあつた。だが、エル君の意向を聞いたミツバ1先生は難色を示した。自分には研究指導ができないといいたのだ。理由は、ミツバ1先生自身がスラム研究を行った経験がないから（本音はそのような泥臭い研究を嫌っていたからなのだが）。ミツバ1先生はエル君以外の大学院生の指導においても、自分が取り組んできた領域以外のテーマを認めようとはしなかった。

エル君はミツバ1先生が指導を拒む姿をながめながら3年前のワッショイ先生の言葉を思い出していた。大学2年生の「建築構造力学Ⅰ」の授業中にワッショイ先生はこういった。

「この中で、将来、大学院に進学して研究者になろうと思っている人はいますか。もしいるならば、言っておきたい。絶対に、指導教員と同じテーマで研究してはダメですよ。それだと、長年そのテーマに取り組んでいる指導教員に勝てるわけがないからね。指導教員もしたことのない、もっと言うと他人の手垢に染まっていない、自分独自のテーマを見つけなければダメだ」

「ワッショイ先生の言葉が正しいよな、絶対に！」  
そう考えていたエル君に、ミツバ1先生が思わぬ助け舟を出してくれた。

「堂島公立大学のミツバ2先生がスラム研究に取り組んでいる。私の古くからの友人だ。紹介するので、ミツバ2先生の研究室でしばらくお手伝いをしなさい」

ミツバ2先生は、学部時代は社会学を専攻し、大学院から都市計画の研究を始めた人で、スラム問題に関しては豊富な知識を持っていた。ミツバ2先生は研究室を訪れたエル君を歓待し、エル君の修士論



文のテーマにも大いに興味を示した。さらに幸運が重なった。エル君の研究テーマに西京府の土木事務所が興味を示し、なんと、西京府からの委託研究という名目で補助金まで提供してくれた。エル君が考えていた以上に画期的な調査研究だったのだ。

スコッター集落の住民組織の人たちとともに「実態調査チーム」を結成した。ミツバ2先生も自ら研究代表を買って出てくれた。あとは調査を実施するだけだ。事態は順風満帆に推移するものと思われた。

ところが、調査は一向に進展しなかった。来る日も来る日も、エル君はミツバ2先生の研究室にこもって膨大な数の文献資料のコピーに取り組んでいた（取り組まされていた）。自治体が発行した調査研究報告書や古い書籍、これらを一冊まるごとコピーし、製本機で製本するのである。30数年前の研究者たちは著作権などまったく意に介していなかった。

エル君は見抜いていた。

「ミツバ2先生の研究は資料を蒐集すること自体が目的となっている。入手した資料をコピーして製本することで、研究を終えたような気になっている。この人はただのコピーマンだ。独創性の気配は微塵も感じられない」

エル君は不安になった。それでも、ミツバ2先生は必ずどこかのタイミングで実態調査のゴーサインを出してくれるだろうと信じていた。だが、甘かった。ある日、ミツバ2先生がいった。

「僕は来年、教授に昇進することができるんだ。だが、条件として今年中に博士論文を提出することを求められている。エル君、その作業を手伝ってくれないか。僕が教授になった暁には君の面倒をずっと見てあげるよ」

エル君は驚いた。そして問い質した。

「神川スコッター集落の実態調査はどうなるのですか？ 地域の人たちも、みんなヤキモキしながら私たちを待っています。それに私も自分の修士論文を完成させなければなりません」

「実態調査は断念してほしい。エル君の修士論文

も1年先送りしてくれないか。そうすれば、その後は僕が面倒をみるから」

エル君は決意した。

「私一人で実態調査をやります。ミツバ2先生の助けは借りません。お世話になりました」

そういつてエル君は堂島公立大学のキャンパスを後にした。その後エル君は独学で調査票を作成し、ボランティア活動で地元を支援している医師や教師たちと協力し合い、実態調査を無事やり遂げた。

都市計画的な課題は、スラムクリアランス後の住民たちの移転先をどのように保障するか、ということであった。移転先の用地、これが最大の難問であるが、自治体には用地を新たに取得する財政的余裕などなかった。そこでエル君は、このエリアに新たに高速道路のインターチェンジが建設される計画があることに着目した。これとの抱き合わせであればプロジェクトとして成り立つ。

神川と多美川が合流する地点を現状よりも500mほど上流にずらす工事をすれば、現在堤防となっている場所を宅地化することができる。法律的には、地目転換をするだけで、そこに公営住宅を建設することができる。こうして修士論文を完成させた。

（後日談その2）：この提案は10年後に本当に実現することとなる。国土整備省、西京府、西京市が「合同対策本部」を組織し、高速道路の開通に合わせて公営住宅の建設を含む住環境整備事業に乗り出したのだ<sup>11)</sup>。もちろん、エル君もこのプロジェクトに関与することとなる。エル君は西京大学工学部建築学科の教官になっていた。現場に同行した大学院生のA君とB君が興味を持ち、このテーマを二つに分けてそれぞれが修士論文を完成させた。

A君とB君は二人とも、建築学会全国優秀修士論文賞を受賞した。一つの研究室から二人の受賞者が出ることなど、他に例を見ない快挙であった。

A君は博士後期課程に進学してこの研究を継続し、博士号を取得した。現在は大学教授である。B君は国土整備省の官僚となった。

## （2）“権威”への挑戦

修士論文が軌道に乗った頃、建築学会が主催する特別研究会が浪速駅前再開発ビルで開催された。

研究者はもとより、自治体の都市計画担当者、民間のコンサルタントなど、プロ集団が出席していた。人数は50名程度。講演者は仲上太一郎。大正9年（1920）に帝国大学工学部建築学科を卒業し、内務省官僚を経て、戦後は堂島公立大学教授となった。学会や都市計画行政方面で活躍し、関西都市計画界の大御所といわれた人物であった。85歳と高齢であったが、もの凄いバイタリティの持ち主であった。なんと、新たに単著を出版したのである。研究会はその報告会であった。

エル君の指導教員であるミツバ1先生も仲上太一郎の弟子であり、研究会の幹事兼司会をしていた。エル君も無理矢理その書籍を買わされ、研究会にも出席することを求められた。

本のタイトルは「都市学と総合アセスメント」。難解な著書であったが、せっかくだから事前に読み終えて研究会に出席することにした。疑問点はノートにまとめておいた。

仲上太一郎の講演が終わると質疑応答時間となった。会場には緊張感が走り、誰も手を挙げない。

空気が読めないエル君が手を挙げた（本当は空気を読んでいたので……）。

司会者のミツバ1先生は驚きと不安が入り混じり、表情を曇らせた。おそらく、とんでもなく的外れな発言をするのではないかと心配したのであろう。

エル君はノートにまとめてあった質問内容を披露した。

「仲上先生はご著書の中で次のように述べておられます。

『志布志湾を埋め立て、工場を建設して雇用を増やし、県民の生活を豊かにしようという知事の呼びかけに対して、志布志の老婦は、スモッグの下でピフテキを食べるよりはこの青空のもとで梅干をなめた方がよいと言いつつたのである。これは180度の価値の転換なのである。それは主体の転換であり、

かつ住民の価値観の転換なのである』<sup>12)</sup>。

そこで質問です。“青空のもとでピフテキを食べる方法”は見いだせないのでしょうか。

つまり、環境保全と生活の豊かさの両方を実現させる都市計画技法というものは存在するのでしょうか。あるいは、そのようなことはあり得ないことなのでしょうか。その点についての仲上先生の見解をお聞かせください」

ミツバ1先生の表情に変化が見られた。満面に笑みを浮かべながら頷き、エル君の方を頼もしそうに見つめていた。参加者たちの視線は仲上太一郎に注がれた。

仲上太一郎は10秒間ほど沈黙したまま腕組みをし、「うう～ん」と唸っていた。そして「ガッハッハッ～」と豪快に笑いだした。

「難しい問題だね」

答えはたったそれだけだった。エル君は失望した。同時に嬉しい気分になった。仲上太一郎は著書の中で自身の膨大な読書経験を披露していた。それを読んでいると、一生かけてもこの人の知識には追いつけない、そう思って暗澹たる心持になっていた。

けれども、いま、その仲上太一郎が修士2年の大学院生の質問にまともに答えられないでいる。これはいったいどういうことか。知識が豊富であるからといって必ずしも独創的な研究を生み出すわけではないということを物語っているのだ。もちろん、独創的な研究には豊富な知識基盤が不可欠ではあるが、それ以上にセンスと発想力がものをいう。

「越えることができるかも知れない」

不遜にもエル君はそう考えた。すると嬉しさがこみあげてきた。

（後日談その3）：このことがあってから、エル君はその後の研究生活で「都市の開発と保存」という古くて新しいテーマに関心を持ち続けた。そして10年後、独自の理論（アーバン・モザイク）を開発し、国際コンペに応募した。このコンペには世界中から2000人以上の第一線の専門家たちが応募した。

エル君はここで最優秀賞を受賞し、賞金300万円をゲットした<sup>13)</sup>。

次の日、研究室にいとミツバ1先生が話しかけてきた。

「昨日はいい質問をしたね。よく勉強してきた証だ。あの後、堂島公立大学のミツバ3教授と喫茶店に行ったのだがね。ミツバ3先生は私の先輩でもあり、仲上太一郎先生が退官された後、その後継者となられた方だ。そのミツバ3先生が昨日の質問を聞いて君のことをとても気に入ってくださったのだよ。ミツバ3先生は、エル君なら自分のところの博士後期課程に受け入れてもいいよ、といてくださった。どうかね、博士後期課程に進学して研究者の道を歩まないか」

とてもありがたい話ではあったが、エル君は逡巡し、結論を先送りにした。エル君は学部生時代の恩師であるトリータ先生のもとを訪ねた。そしてこの一件を報告し、助言を求めた。

トリータ先生はそれまでに見たことがない厳しい表情でいった。

「これからは海外の大学で博士号を取得して国際的に活躍する人々が登場する時代だ。だから、国内の大学院で博士号を獲るなら、国際競争力のあるところでなければダメだ。どこでもいいというわけではない。最低でも西京大学だね」

エル君は驚いた。これがトリータ先生の本音なのかと。そして先生の率直な助言に感謝した。今にして思うと、どこの大学で博士号を獲ろうと問題はない。要は実力がすべてなのだから。けれども、トリータ先生に心酔していた当時のエル君はトリータ先生の言葉に従うことにした。

## 6. シャーロック・ホームズのように

### （大学院博士後期課程時代、研究者への道）

ホームズ先生は西京大学工学部建築学科助教授で48歳だった。当時、ホームズ先生は建築学会の都市

計画分野におけるスーパースターだった。ファンが多かった。もちろん敵対する者も多かった。

エル君は建築学会のシンポジウム場で、ホームズ先生が鋭い論理で討論相手を滅多切りにしている姿を目の当たりにしたことがある。やられた相手は反論さえできず、しかめっ面をしていた。他方で、ホームズ先生は建築家としても優秀なデザイナーであった。黒山章紀という世界的に著名な建築家があった。彼は学生時代を西京大学で過ごし、ホームズ先生とはクラスメイトであった。その黒山章紀が「デザイン力ではホームズ君に勝てなかった」と述懐していた。絵画や版画もプロ顔負けというぐらい上手かった。まるで、レオナルド・ダヴィンチのような才能の持ち主ではないか。けれども、エル君がホームズ先生にもっとも惹かれたのは、推論をまじえた論理的思考力を披露する姿であった。まるで、シャーロック・ホームズが実在するかのようにであった。

エル君は大学院博士後期課程の進学先を西京大学に定めた。ホームズ先生に弟子入りすることに決めたのだ。当然のことながらミツバ1先生は反対した。堂島公立大学のミツバ3先生に対して面目が立たない。また、当時、博士後期課程への進学はプロの研究者を育成することが前提だったことから、講座制を取り入れている西京大学工学部建築学科では募集人数は1～2名であり、内部進学者でほぼ埋まってしまう。外部から受験するエル君が合格する見込みはほぼゼロというのがその理由であった。

それでもエル君は受験した。そして、あろうことか、合格してしまった。

合格通知をもらってしばらくすると、ホームズ先生から呼び出しがあった。

残暑厳しいある秋の日、初めてホームズ先生の研究室を訪ねた。驚くほど狭く、うず高く積み上げられた書類で部屋中が埋め尽くされていた。

ホームズ先生は初対面の学生を笑顔で迎え入れた。先生とエル君は小さなガラステーブルを挟んで互いに向き合って腰を下ろした。

エル君はまだ修士課程の2年生であった。修士論

文も完成には至っていなかった。堂島公立大学のミツバ2先生のもとを威勢よく飛び出し、独学で神川河川敷のスクォッター集落の調査を終えるまではよかったのだが、そこから得られたデータをどのように分析してよいのか、まったく手掛かりがつかめず、途方にくれていた。エル君はそのことをホームズ先生に正直に打ち明けた。先生は終始、両足を組み、膝の上で両手を重ね、フワフワした表情で、やや斜め上の空(くう)を見つめていた。エル君の話にはまるで興味が沸かない、そう見えた。何か別のことを考えているようでもあった。

「先生は僕の力量に失望しておられるのであろうか、それとも、気分を害しておられるのであろうか」

そのような考えが頭をよぎり、不安であった。それでもエル君はかまわず一気に自分の研究内容と進捗状況を説明した。

沈黙が続いた。エル君は重苦しい心持ちだった。やがて、ホームズ先生はゆっくりとエル君の方に視線を移した。エル君は恐る恐る先生の顔色をうかがった。眼鏡の奥にある先生の目が恐ろしく鋭い光を放っていた。しかし、とても優しい眼差しでもあった。

「住民が回答したとことと客観的事実との間にギャップがあります。その関係性をどのように説明することができるのか、それを考えるのが君の仕事です」

ホームズ先生の助言はこの一言だけであった。しかし、この一言でエル君の分析作業は急速に進展した。まさに「目から鱗」というのを体験した瞬間であった。

## 7. 教訓

エル君は9年間でホームズ先生のもとで過ごした。博士課程を終え、工学博士を取得し、日本学術振興会特別研究員を経て、文部教官となった。その間、ホームズ先生の研究指導のやり方を目の当たりにしてきた。

ホームズ先生は大学院生や学部生が何をテーマに

したいといっても決して否定はしなかった。

ホームズ先生の研究指導方法の最大の特徴は、テーマの種類よりも、研究を支える論理を構築することの方に重きをおくところにあった。

十人十色、それぞれ異なるテーマであっても、それぞれの進捗状況に応じて、その時点で求められている着地点、いわゆる「落としどころ」を的確に指し示す。そうすることで学生たちの不安を取り除く。これが、ホームズ先生が果たしていた指導教員としての役割であった。だが、これは「言うは易く行うは難し」である。自らが厳しいハードル(たとえばレフリー付き論文など)を乗り越えてきた人でないと、このような芸当はできない。

エル君は、そのような能力をもたない人たちが、指導教員としての立場をひけらかし、周囲に弊害をまき散らしている例を数多く目撃した。大学院生から素朴な(時には鋭い)質問を浴びせられると機嫌が悪くなる。

「そんな質問をするとは、君はまだ勉強が足りない！」などといって、逆切れしたりする。

エル君はこれを「研究をしない自称研究者の弊害」と呼んでいた。

## あとがき

大学院生、なかでも将来プロの研究者になることを目指している人であれば自覚しておかなければならないことがある。それは、独創的な成果を出そうとすればするほど、独学の道を歩まなければならない、という現実と直面するということである。これはとても孤独で辛いことだ。けれども、誰も発見したことのない研究成果を生み出そうというのだから、当然といえば当然である。指導教員が懇切丁寧にゴールまで導いてくれることなど期待してはならない。自分自身で切り開く、これが研究者として成功している人たちに見られる共通点なのだ。指示待ち人間は論外である。まっとうな博士論文を完成させることなどできない。もちろん、指導教員は決



して敵ではない。アドバイザーであり、応援団長である。そのあたりの線引きがクリアになれば、指導教員の有り難さもわかってくるし、心強い存在にもなる。自分たちの関係性をどのように構築するのか、大学院生と指導教員の間でこの点についての合意形成が求められるのである。

「博士後期課程の院生と私の間で行われるゼミ、それは常に真剣勝負でなければならない。学生と教員の間関係と思ってはダメだ。互いに対等の研究者として、時にはライバルとして、議論を戦わせ、切磋琢磨するのだ。そうでないと研究は楽しくならない。一方的な指導だけを求めてくる大学院生など、私は必要としない」

ホームズ先生が初対面のエル君にいった言葉である。

## 註

- 9) リム ボン：「学術論文の執筆方法に関する一考察—(その1) 立ち位置・テーマ・心意気—」, 立命館産業社会論集・第53巻第2号, 77-84, 2017年9月.
- 10) 建築学という学問は極めて多彩な領域で構成されている。建築学科の学生は、設計製図、デザイン、絵画、哲学、構造力学、鉄筋コンクリート構造、鉄骨構造、木造、照明、空調設備、測量、造園、そして建築法規などを学ばなければならない。
- 11) リム ボン：「鴨川スコッター地区の住環境整備と地域支援活動」『生活世界としてのスラム』, 233-251, 古今書院, 2001年.
- 12) 中澤誠一郎：「まちづくりと住民の価値観」『都市学と総合アセスメント』, 135-141, 大明堂, 1982年.
- 13) リム ボン：「モザイク模様の都市計画」『歴史都市・京都の超再生』, 27-42, 日本評論社, 2012年.